

松居家墓碑除幕式記念撮影

左阿彌樓齋宴席々次

□ 松居一良

□ 松居文左衛門

□ 松居文次郎

□ 松居泰次良

□ 森半次郎

□ 松居この清隆妻

□ 松居とみ清隆妻

□ 松居すゑ清武妻

□ 松居九郎三郎

□ 森嘉平

□ 村松三郎兵衛

□ 松居謙三

□ 松居房治郎

□ 松居良三

□ 松居光三郎

□ 松居しげ清元妻

□ 松居ふき清忠妻

□ 松居正子清忠女

## 松居家誌終

## 筆を擱くに當りて

清き愛知川の水は小椋谷の溪流や和南川の流をも合して大河となり、山上村より下流に於て南は神崎、蒲生兩郡、北は愛知郡に堰揚られて十一支流となり、水田を灌ぎ美稻を養ひ、末流南は保内川となり、筏川となり、北に堰かれし諸川も北方宇會川に合流す、源三位頼政より流れ出し下間の清き水は其一脈を遠き近江の愛知郡に分ちありしが、三百五十春秋と立つ年波に其淵源も忘れしに、端なくも下間家の系圖より發見して清き源泉の名もなつかしき京洛にありし事明確となりしは寔に不可思議の奇縁にして或は祖靈の暗示にも因るものならん歟、此くて今は其の本分支流十二家の子孫を合記して一卷を編するは恰も北に堰かれし諸川の水を併合せし宇會川の流に等しきものか、曾ては何等縁故無かりし編者が此書を編する亦如何なる奇縁にや、一族十二家は今より以後相憑り相戒めて此の清き流を瀆すことなく愈々業務に奮勵されて千代に八千代に子々孫々の榮えられんことを望む、是れ我國民性の根元にして報本の大義ならん、太祖源三位頼政の歌に「君か代は千尋の底のさゝれ石の鵜のゐるほとにあらはるゝまで」の咏あり、これは時の大御代を壽きし祝歌なれども

編者は筆を擱くに當り此古歌を借りて松居家一族の將來を祝福せん、

八〇

附記

松居氏より本書に編者として山人の醜容を收めんことを請はるゝも編者はかゝる事の道に非ざるを以て固辭したり、然るに記念の爲なりとて再三書面に面談に要望されるれば好意辭しがたく終にレンズの前に立ちて卷末に加ふることゝせしは返すゝ恐懼に堪へず、

編者しるす



編者中川泉三肖像

昭和三年三月二十日印刷  
昭和三年三月二十五日發行

【非賣品】

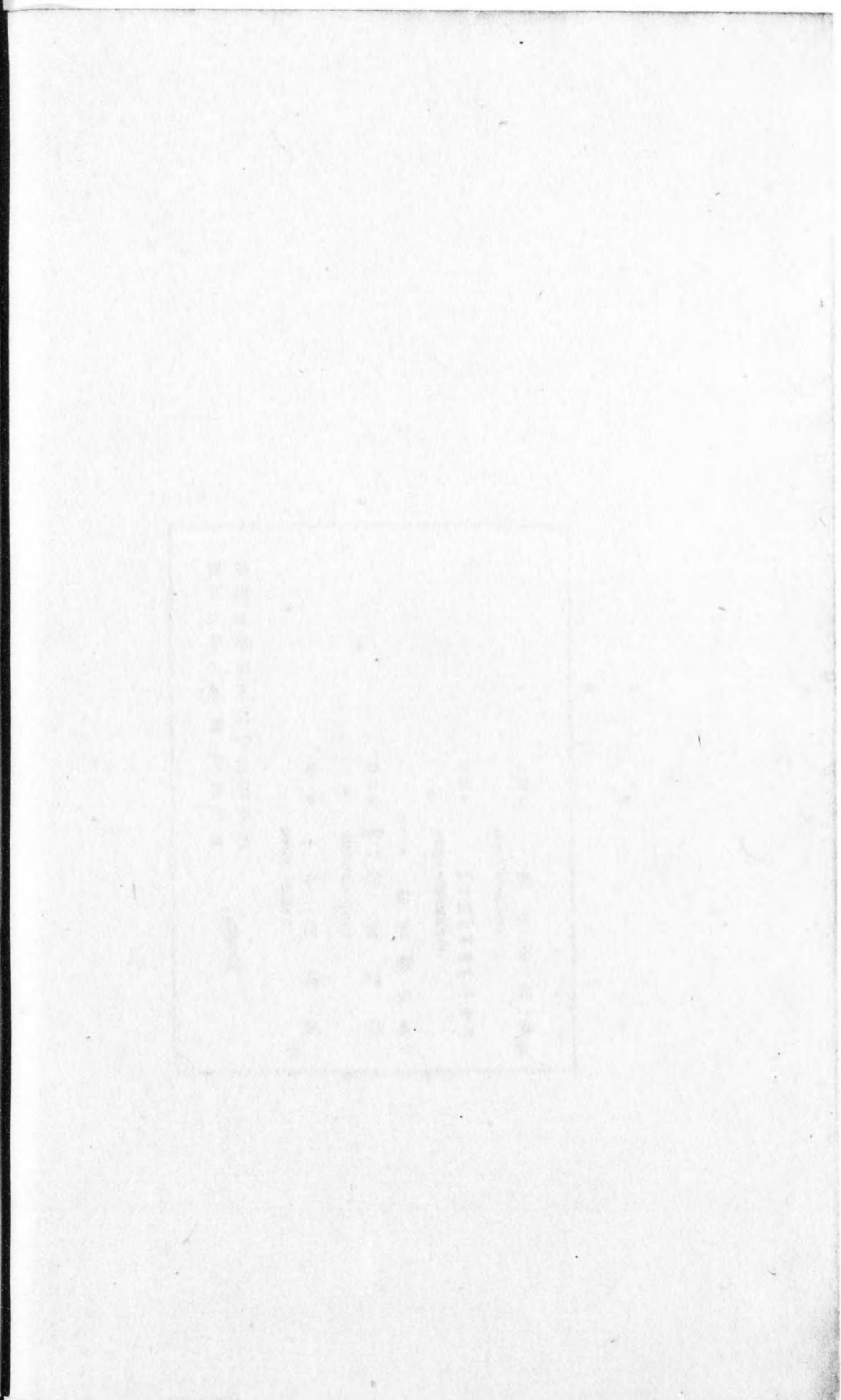
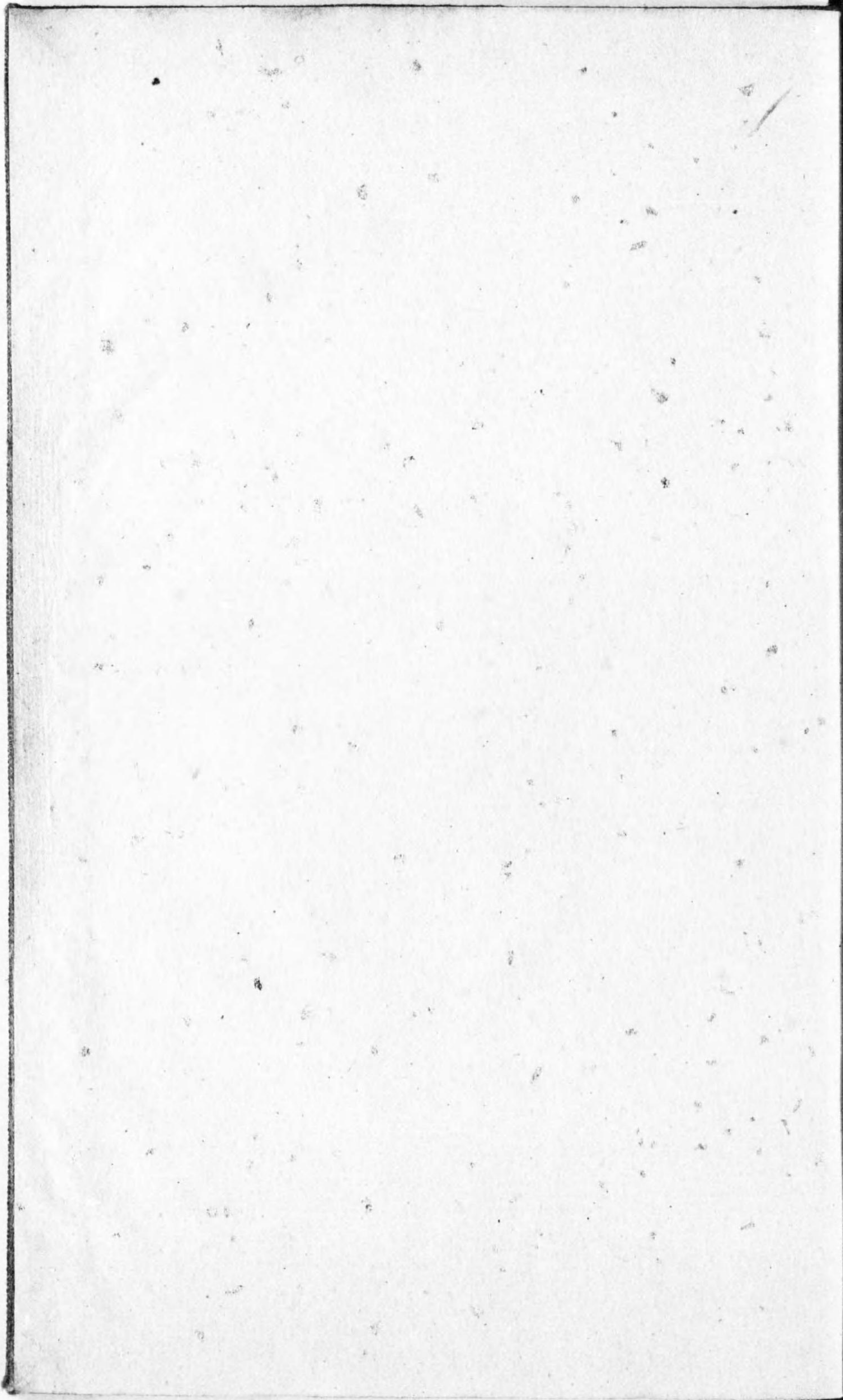
編輯者 中川泉三

發行所 株式會社 松居商店

代表者 松居泰次良

印刷所 東京市下京區西園院七條南  
内外出版印刷株式會社

印刷人 須磨勘兵衛



終

